



Metals Focus – Precious Metals Weekly

貴金属ウィークリー 第88号 2024年8月11日

ゴールド

世界の株式市場大荒れの中で2370ドルを下回ったのちにいくらか持ち直したが、金利の上昇とドル高で上昇局面は限定

シルバー

金銀比価は89に上昇し、4月以来最高に

プラチナ

ACEAによるとEUの2024年上半期の商用車新車登録はバンで15%、トラックで3%、バスで29%それぞれ増加

パラジウム

米国の7月の普通乗用車販売高は、販売店が6月のサイバー攻撃から立ち直って前年比マイナス0.4%の130万台

インドの関税引き下げ UAEとのシルバー貿易に打撃

インド政府は7月に突然、ゴールド、シルバー、プラチナの輸入関税を引き下げると発表した。シルバー地金の関税は15%から6%に、シルバードーレの関税は14.35%から5.35%に下げられた。

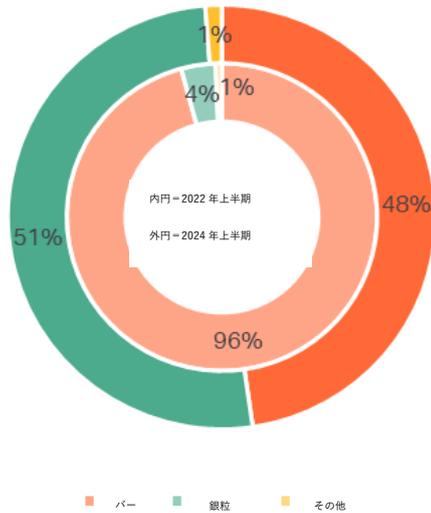
本稿と「India Monthly」に目を通してきている読者は、我々が昨年、包括的経済連携協定(CEPA)の元でのインドとアラブ首長国連合(UAE)のシルバー貿易について報告したことを覚えていると思う。この経済合意で決められた有利な関税率のおかげで、UAEからのシルバーはインドが輸入する量の大部分を占めるまで増えていたのだが、今回の関税措置でその優位な状況が消え、今後数年かけても回復は困難なほどに両国間のシルバー貿易は大幅に減少した。

インドは2022年2月にゴールド、シルバー、プラチナの輸入関税が他よりも低い項目を含む CEPA をUAEと締結した。合意された輸入関税の仕組みは商品によって違うが、シルバーは段階的関税撤廃(TEP)のカテゴリーに属し、10年かけて関税が下がる商品の一つとなった。この枠を利用するためには輸入業者は原産地証明書とともに、シルバーがUAEで精錬されたことを証明する書類を提出し、さらに最低3%の付加価値をつける必要がある。UAEから輸入するメタルに関しては、シルバーには輸入量の制限がないが、ゴールドは CEPA 締結5年目となる2026年の200トンを限度に、毎年20トン輸入量が増える仕組みだ。

7月の発表以前の通常枠のシルバー輸入関税は15%で、CEPA 枠だと2023年は9%、2024年は8%となるため、CEPA 枠で課される3%の付加価値をつけても、通常枠よりも2023年は3%、今年は4%、関税率が低くなり、UAEからの輸入は明らかに有利だった。

インドの商品タイプ別シルバー輸入高

*



*2022 年上半期(CEPA 以前) と 2024 年上半期(CEPA 以後)

出典: インド関税局

CEPAはインドのシルバー輸入に二つの大きな変化をもたらした。輸入されるシルバーの多くが地金ではなく、銀粒に変わったこと、そしてUAEが最大のシルバー供給国になったことだ。今までインドが輸入するシルバーの9割は地金だったが、3%の付加価値をつけ原産地証明書が必要となることを避けるために、UAEの製錬所はインド向けには銀粒を生産するようになった。銀粒は2022年の輸入シルバーに占める割合が3%にすぎなかったが、2023年にはそれが17%に増え、今年の上半期には51%にまで増えた。

UAEは、有利な関税率を背景にインドにとって最大のシルバー供給国になったが、2022年の国別シルバー輸入では1%にも満たない存在だった。それが2023年には13%に、2024年上半期は49%に急増した。逆にそれまで最大のシルバー供給国だった英国と香港を含む中国からの輸入は、2024年上半期はそれぞれ22%と10%に減った。

そして、UAEが最大のシルバー供給国となっただけでなく、シルバーの輸入量そのものが増えた。今年2月には、CEPA枠の4%の関税差を利用するために、過去最大となる2250トンのシルバーが輸入され、2024年第1四半期だけでも2023年全体の輸入量を上回ったのだ。

3月のある時点でインドの保管庫には1500トンのシルバーがあったとされている。今では在庫は減っているはずだが、膨れ上がった輸入量を消化できるだけの国内消費がなかったため、まだかなりの在庫を抱えているだろう。インド国内のシルバー価格は、9万5000ルピー/キロを超えるなど何度か史上最高値を付けるほど上昇したことも国内需要に影響し、2024年第1四半期は過去最高となる3771トンだったシルバー輸入量は、第2四半期にはわずか549トンにまで落ち込んだ。

7月に関税率引き下げが発表されるまでは、UAEからのシルバー輸入とそれに占める銀粒の割合は、関税がゼロになるCEPA 合意10年目の2032年まで増え続けると予測されていた。しかし、今回の突然の発表で状況は大きく変わるだろう。通常枠のシルバー地金の輸入関税が6%となれば、CEPA枠の11%(3%の付加価値を含む)よりも低くなり、UAEから輸入する意味が全くない。UAEにとって有利だった条件は消滅した。

たとえ予定通りにCEPA枠の関税率が毎年下がって6%以下になっても、UAEとの貿易が実質的に回復するには数年かかるだろう。特にインドとの貿易増加を見越してシルバー生産能力増強に投資していたUAEの精錬所の受けた痛手は大きい。たとえ関税率が再び有利になったとしても、インドの関税制度に左右されるリスクに対する不安で、UAE側でも投資を再開する心境にはなりにくいだろうし、再び英国と中国が有力なシルバー供給国として地位を取り戻す可能性もある。

一方でインドのシルバー産業と消費者にとって今回の関税カットは降ってわいた朗報だ。前述したようにルピー建シルバー価格の高騰で今年の個人需要は低迷していた。ここに9%もの関税率カット、そして世界的なシルバー価格の下落で、ルピー建シルバー価格もピークから15%以上も下がった。さらに今月からはインドのお祭りシーズンが始まり、10月は結婚式シーズンだ。消費者も宝飾品業界も期待が高まる。シルバー価格がこのまま推移するか、あるいはもっと下がれば、これからの季節はシルバー需要にとっては大いにプラスに働くだろう。

インドの国別シルバー地金輸入

